

# 日本人のみた外国 インターネットと「党の国」 (カルチャー・ショック)

著者	藤崎 成昭
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	118
ページ	50-50
発行年	2005-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005675">http://hdl.handle.net/2344/00005675</a>

## インターネットと「党の国」

藤崎成昭

東南アジアはさる移行経済国でのお話です。彼の国の土を初めて踏んだのはかれこれ九年ほど前のこと。日本からの経済協力にまつわる大型ミッションの一員としての訪問でした。空港から首都へ続く道も、周りを見渡す限り田んぼというのどかな風景が広がっていました。農作業に励む人々の姿には郷愁を感じたものです。党の偉い方も参加された会合も、議論に双方それぞれの熱気が感じられ、有意義なものでした。いささか違和感を覚えたのはコーヒープレークでの歓談の際など、彼の国の人々の明らかに意図的と思えるやり方で「外国人」

(私たち)との「距離」を取る姿でした。専門が同じで意気投合、議論が盛り上がっているのに、話は突如打ち切られる。同じ会場で次に顔を合わせても相手は素知らぬ顔。ミッション参加者の多くがこんな経験をしたものですから、こう推測し合ったのです。「党の国」らしい。相互監視の仕組みでもあって、外国人と仲良くしているところなど見られたくはないのだろう。」

世紀の変わり目を挟んで世界的に急速に進化した情報通信革命。インターネットの恩恵を享受できる人の数はアジアでも急速に増加しています。彼の国でも事情は同じ。今日では交換する名刺に必ずメールのアド

レスが印刷されていますが、これは九年前にはなかったことです。メールで彼の国の方にも簡単に連絡が取れ、誠に便利ですし、彼の国が依然「党の国」であることも失念してしまいます。ネット社会がもたらした錯覚と言うべきでしょうか。

X氏と知り合ったのは四年前のこと、調査で訪問した政府機関の担当者として、でした。以前、ある日本のプログラムで滞日の経験もあり、それもあってか親切に対応いただき、その後時候の挨拶をやり取りするようにになりました。時候の挨拶(シーズンズ・グリーティングス)といっても今日ではメールで簡単に交換することができま

す。さて、一昨年と同じ分野の調査で彼の国を訪問することになり、まずは早速X氏にメールで連絡しました。うれしいことに直ぐに当方の依頼快諾との返事をくれ、しかも頼んでもいない細かいアドバイスまで付いています。「これは幸先がよい」とすっかり有頂天になってしまいました。ところが、当方の具体的な依頼、アポイントの取り付けについては、待てども暮らせども、いつかな連絡がない。この時の調査では最も重要なインタビューの依頼でしたので催促のメールを出すと、直ぐに「了解している」旨の返事をくれるのですが。結局出発

の日までアポイントについての連絡は一切無く、不安を抱えての旅立ちでした。

彼の国に到着後、携帯を持たぬX氏への連絡は、持参のパソコンを用いやはりメールで行いました。言葉の問題もあり(残念ながら彼の国の言葉を話せません)、電話よりは個人宛のメールの方が確実に用を足せるからです。驚いたことに待ちに待った返事はホテルのボーイの手で封書の形で届けられました。希望していた政府機関、大学の研究所の、いずれもトップが会つてくれることになっている。不安は吹っ飛び、喝采です。翌日から実際にインタビューに向いてさらに驚きました。当方のインタビューに対し、どの機関でも関係者が実に根気よく対応してくれたのです。期待を遙かに超えた成果が上がったことは言うまでもありません。ところで彼の国に滞在中私からのメールに対しX氏がメールで返事を寄越したことは一度もありません。電話あるいはホテルのフロントに届けられる封書なのです。その「理由」に思い当たったのは帰りの飛行機の中。既にX氏宛てに面会してくれた各氏の実名を列挙したお礼のメールを送ってしまっていました。

(ふじさき しげあき／アジア経済研究所新領域研究センター)